

# 幽霊に恋した男の子

俳人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ホグワーツ魔法魔術学校。

ある男の子の話をしよう。

「すぎです!!!つきあってくださいっっ!」

「嫌です」

出会って5秒で告白して、2秒でフラれた。そんな、哀れな男、幽霊に恋した男の話を始めよう

目次

第1話	1
2話	5

## 第1話

キングスクロス駅。魔法使いの卵達が、魔法魔術学校ホグワーツへ学びに行くために作られた電車の駅である。

駅構内では様々な魔法使いの親子が、これからの生活を語りあっていた。

「……憂鬱だ」

この俺、ケヴィン・アレステインもまた今年からホグワーツ1年生という訳だ。俺もまた父とともに生活用品、——ほぼ本だが、が入ったトランクを転がし父とともに語っていた。

「まあまあ、行ってみるといいところだぞ？ご飯はうまいし、仲のいい友人もできる、なにより魔法を学ぶのにあれほど素晴らしい場所はない！」

「父さん、学ぶだけなら、うちの図書館でもできるだろ」

やれやれ、といった顔をして父はケヴィンの頭に手を置いた。

「はあ、お前を図書館から外を出さなかったのも悪いんだろうな……」

「父さん!!」

「本のなかでは学べないことがホグワーツではたくさんある……恋とかな」

そう言っつて父はぱちりとウィンクをした。……うへえ。

「おっさん、気づけ、恥ずかしいこといってんぞ」

「……とにかくだ、ホグワーツでひとり好きな女の子を作ること、帰ってくるまでに、一人はだ、もし出来なかったら……図書館入館禁止!!!」

そう言っつて、俺に杖を振り上げ無理矢理電車に乗せた。

「いや、ちよつとまでええええええええええ!!」

電車は唸りをあげ、ゆっくりゆっくりと進んでいった。

「ここ、すわってもいいっ？」

さざりと流れるブロンドの髪に、真っ白い肌。そして、ごくごくして変な服を着た女の子。

「なんだ、ルーナか」

「なんだとは失礼なんだな」

そう言つて、ルーナは俺の返答を聞く前に向かいの席に座つてきた。

ルーナ・ラブグッド。父親は雑誌編集長をしており、よく取材の情報収集でうちの図書館に来ていた。そのの付き添いでルーナとはよく顔を合わせていた。ジツとルーナの顔見見つめながら言った。

「……なあ、ルーナ、俺はお前を好きなんだろうか」

「それを私に聞いてるところでダメだと思ふな」

そう言つてプイと顔を背け、窓を眺めていた。俺もコイツのことは昔から知っているが、異性として見たことはなかった。

「はあ、好きな人なあ……」

「どうしたの？」

ポツリポツリとルーナに、父に言われたことを語つた。

「ふーん、お父さんも心配なんだね」

「心配つていふかなあ……」

「まあ、意外と早く見つかるかもしれないよ」

そう言つて、カエルチョコを開けた。

「そーいや、ルーナはいきたい寮とかあるのか？」

「んー、多分だけどレイブンクローだと思ふな、うちの家族はみんなレイブンクローなんだもん」

「あー、それで行くと俺もレイブンクローかね、あー、たぶんだけどレイブンクローに好みの女の子なんていねえよ……」

「それは私にも失礼なんだな……」

ルーナはムツとした声で呟いた。

実際のところ、この言葉は半分合っていた。しかし、もう半分は間違っていたと言ふほかないだろう。俺もこのとき、恋愛にそこまでお熱になるとは思わなかつたんだから。

そこからは、トランクの本を何冊か取り出し、ルーナも勝手にそれをとつて、好きに読んでいた。

そんな静寂の時間は、突如開かれたコンパートメントの扉を開ける音によつて壊された。

「今年はおかしな雑誌の家のやつがホグワーツに来てるってホントなんだな」

ブロンドの髪を輝かせた、不気味なほど青白い肌の少年。俺はこの少年を知っている。

「なんのようだ、ドラコ・マルフォイ……」

後ろのデカイ取り巻き二人は瞳をギョロギョロと動かし、こちらをせせら笑った。

「ここでは『さん』をつけろよ、アレステイン、年長者なんだからな」  
嫌味たらしくドラコは笑い、言った。

「まあ、しかしアレステイン、君は聖28氏族ではないが純血の家系だ、こっちのコンパートメントに来るといい、歓迎するよ」

「俺を誘いたかったら、もう少しロマンチックで詩的な言葉を探すんだな」

「私行ってもいいよ」

「ルーナ、ちよつとお口チャック」

そんなやり取りをしていると、青白い肌を徐々に赤らめ、目をかっ開いていた。

どうやら照れているようではないようだ。違うか、違うな。

「後悔するぞ、アレステイン！ハリー・ポッターのようにはならないことだな！行くぞ！」

ドラコは取り巻き二人を連れて、どこかへ行ってしまった。なにしに来たんだ、あいつ……。

「そうだ、一個上にはハリー・ポッターもいるんだったか」

ルーナはコテンと首をかしげ、考える仕草を取った。

「ハリー・ポッター……？」

「生き残った男の子だよ、お前の父さんの雑誌でもたまに出るだろ」

いや、まあ、クヴィラーにはマジでちよつとしか出てないが……。

断然、しわしわ角なんかの方が出ていることだろう。

そうこうしている内に車内ががやがやと賑わってきた。もうそろそろ、ホグワーツに着くらしい。

「さて、学校生活どうなるかねえ……」

ぼそりとケヴィンの口から、そんな言葉が出た。車窓を見ると、本の挿し絵でしか見たことのなかったホグワーツ城がそびえ立っていた。

学校生活や、新たな本に学友、そしてまだ見ぬ好きな人に思いを馳せながら

ケヴィンは本の頁に目を落とした。

## 2話

「イツチ年生！イツチ年生はこっちだ！さあ、集まれー！」

電車を出ると、黒い髭をふさふさに蓄えた大男が一年生を集めていた。

「おおーアレステインのちびっこじゃねえか！そうか、おめえも大きくなつたなー！」

「やあ、ハグリット、『怪物的な怪物の本 巨大版』の返却が遅れてるよ」

そう言うと、ばつの悪そうな顔を俺に向けた。

「冗談だよ、父さんが『あれを借りたのはここ100年で君ひとりだから貸し出し無期限にする』ってさ」

「ねえ、ケヴィン、わたしの書いた『しわしわ角冒険譚』はいつ図書館に置いてくれるの？」

「… あれは、あれでどうにかするよ」

そんなやり取りを見てハグリットは大きく、ゴツゴツした手を俺たちの頭に置いてガシガシと撫でた。

「さあ、イツチ年生！しっかりついてこい！こっちだ！」

野太いハグリットの声に着いていき、ホグワーツへ向かった。

「皆さんは、これよりホグワーツへ入学します。まずは…」

変身術を教えているマクゴナガル先生は生徒を集め、これからの話をしてくれた。全寮制なあ……、仲いい子見つかるかなあ……。

「では、これより組分けの儀式を始めますので、皆さん食堂へ」

そう言うとザワザワしながら生徒の列は動き出した。

「そういえば、ルーナ組分けの儀式ってなにするか知ってるか」

「知らない、パパはお前は絶対にレイブンクローだとしてか」

そんな話をしていると、食堂の扉の前につき、マクゴナガル先生がその扉を開いた。

「へえ、……、いいじゃないか」

ふと小さくそんな言葉が漏れてしまった。



食堂は、とても長い机が4つ並んでおり、奥にはそれぞれの寮の紋章が掲げられていた。なにより目を引くのは天井だ。幾百もの蠟燭が魔法でフヨフヨと浮かされており、その奥には、深い深い夜の青に、いくつもの星々が瞬いている。

不覚にも、魔法で創られた星空に見とれていた。そんな俺の様子を見てルーナが、小さく笑っていた。

「……なんだよ」

「いや、なんだかんだ言っただけで気に入ってるなあって」

そんなルーナを無言でチョップし、マクゴナガル先生が話を始めた。

「皆さんには、この帽子をかぶってもらいます、この組分け帽子が皆さんの寮を決めることでしょう」

そういって、マクゴナガル先生は古びた帽子を、置いた。

おお、すげえ。なんか歌ってる。

「では、名前を呼ばれたものは前へ」

そう言っただけで一人一人名前を呼ばれ、帽子を被らされる。人によつてはすぐ決めるが、熟考した末に決める場合もあった。

「次、ケヴィン・アレステイン」

マクゴナガル先生に呼ばれ、つい背筋を伸ばしてしまう……。さつきドラコに大口叩いたし、スリザリんじゃないといいんだが……。

「なあ、アレステインって……」

「アレステイン魔法大図書館の子……？」

ひそひそとそんな会話が耳に入る。うちは名前は有名だが、入る人は限られるからなあ……。中に関して憶測が出るものだ。意外と中は普通なんだけどね。

前にいくと、長い髭を蓄えた先生。アルバス・ダンブルドア校長と目が合う。半月形の眼鏡の奥の瞳は、知的に輝いている。この人、たまにうちにいるけど苦手なんだよなあ……。全部を見透かしてるみたいな感じがして……。

校長にペコリと頭を下げて、椅子に座り、組分け帽子をかぶった。

「おお、そうかアレステインの家の子か……。君の家系はいつも少し悩

むのだよ、知識に富んでいるので様々な可能性に溢れている、しかし、いつも選択は同じなのだよ、…………… 1000年前のあの日からね」

「あー、それって、どういう…」

「レイブンクロー!!」

拍手がレイブンクローの食卓から上がり、帽子が外された。すこし疑問が一つ残りつつも、レイブンクローの席へ向かった。

その後も、問題なく組分けは進められた。ちなみにルーナもレイブンクローだった。

組分けが終わると、ダンブルドアは教員席から立ち上がった。

「では一言、わっしょい、わっしょい!」

それだけ言う杖を一振りし、食卓にご馳走が現れた。

「腹を膨らませるのじゃ!」

髭を撫でながら、嬉しそうに笑った。

「う…………… もう食えん…」

「ねえ、ケヴィン、そのゼリーもらっていい?」

そう言つてルーナが俺のゼリーをかつぱらつていった。元々、そこまで食べる方ではないのだが、ここの食事が美味しいので食べ過ぎてしまった。

細々とカボチャジュースを飲みつつ、周りを見渡すが皆、まだまだ食べている。

「ん?あれは…」

窓を見ると、教師に首根っこを捕まえられる二人の生徒がいた。一人は燃えるような赤毛の男の子と、丸い眼鏡をかけた

黒髪の男の子だ。

「あれって、もしかして……………」

「どうかしたのかな?ミスターアレステイン?」

後ろから静かに声をかけられる。振り替えると、ダンブルドア校長が優しくに笑っていた…………… いつからいたんだよ、この人。

「あー、ちよっとお腹いっぱいになりました…」

「なんと、君の父君はドラゴンのような食べっぷりだったというのに…………… 母君はその倍は食べていたが」

「母さんって、そんなだったんすか…。」

ダンブルドアはゆっくりとうなずき、嬉しそうに笑った。「食というのは、魔法の源じゃよ、たくさん食べねば、よい魔法は使えんからの」

「ハハ、腹減るように、たくさん勉強し…ま、す、よ」

突如、ダンブルドアに向けていた愛想笑いが止まってしまい、言葉も止まってしまふ。いや、それは俺にとって時が止まっていたのかもしれない。

食卓の喧騒も、遠く聞こえてしまう。それほど、視界に入った女性は衝撃的に美しかった。

「ミスターアレスティン。どうしたかの？」

「ケヴィン？ 具合悪い？」

ルーナや、ダンブルドアの声も、遠く聞こえる。俺は二人を無視して、食卓の上に立った。

「え!?!」「なに!?!」「おい、一年生、食卓の上に立つな!」

食卓の皿を避けるようにして、俺は彼女の方へ向かった。

「ひ、一目惚れです! 付き合ってください!」

一瞬の沈黙、ダンブルドア、いや全校生徒の口がアングリとあいていた。

「嫌です、三回くらい生まれかわって出直してきてください」

そう言って彼女、レイブンクローのゴースト『灰色のレディ』ヘレナ・レイブンクローは無表情で、どこかへ消えていった。

俺の学校生活は、奇妙なスタートダッシュを切った。